



メダカは水草を入れないと、卵を産まないの

メダカは、春から秋まで、水温が18度ぐらいで産卵する

メダカは、4月すえぐらいから秋にかけて、水温が18度以上になると、毎日のように卵を産みます。水そうに水草があってもなくても、時期がくれば、産卵します。産卵するのは、夜が明けるところです。産卵したメスは、10数個～40個ぐらいの卵のふさを、こう門の所にぶら下げて泳いでいます。メダカの卵には、細い糸がついていて、この糸がからまって、ふさになっているのです。ふつうは、メスが水草に体をおしつけて、産んだ卵を、水面近くの水草のくきや葉にくっつけます。

水草がないと、卵がしずんでしまう

水そうに水草がなければ、卵は、かたまりになって、水そうの底にしずんでしまいます。やがて、卵は、呼吸のための酸素不足などで、死んでしまうことになります。また、卵や、ふ化したメダカの子魚は、おとなのメダカと同じ水そうに入れておくと、えさとまちがえられて、メダカに食われてしまいます。ですから、水草に卵を産ませ、水草ごと別の水そうに移してやるのです。そっとしておくと、水温が20度ぐらいなら10日ほどで、卵がかえります。

ふ化した子メダカには、ゆで卵の黄身や、キンギョのえさをすりつぶしたものを水でといて、1日に3～4回、あたえます。だいたい、親の体と同じぐらいの大きさに成長したら、親と同じ水そうに入れてもだいじょうぶです。（監修・安部 義孝）

